

苦の坂の峠

市域を通過していた西国街道は、玖波・黒川・小方・木野の各村にわたり、全長七十四町三間（約八・一キロメートル）でした。現在、この区間で鳴川の石畳とともに往時の面影を残しているのが「苦の坂」です。御園側が五町四間（五五三メートル）、木野側が四町九間（四五三メートル）のこの坂は、『小方村「国郡誌」』にも険しさの記述があります。また広島から小瀬川に至るこの街道で、井口の小己斐山、宮内、大野境の鑪出し四郎峠、大野の四十八坂、玖波の馬ためし峠と合わせ「山坂五ヶ所」の一つに数えられています。

安政の大獄で囚われの身となった吉田松陰は、安政六年（一八五九）五月、この峠を越えて江戸へ送られました。

また、この苦の坂には、「市杵嶋姫命伝説」が今に残っています。

巖島神社の祭神である市杵嶋姫命が筑紫から安芸へ移るとき、この苦の坂にさしかかりました。幼子を背に負っていたので息もきれぎれとなり、ここまで大切に持っていた「ちきり」（機織りの縦糸を巻く道具）を坂の上から麓の池に投げ捨て、身を軽くして苦の坂を越えて行きました。

後に、その池を埋めて社殿を建てたといわれているのが「ちきり池神社」です。

大竹市は、数々の歴史絵巻を思い起こさせてくれる「苦の坂」を含め、亀居城跡から木野川渡し場跡までの西国街道を『歴史の散歩道』に設定しています。